

「武庫川国文」第九十二号 抜刷
令和四年三月三十日 発行

王治本 明治三十九年 北海道における詩作と交流

— 小樽・札幌・室蘭・函館(第四回・完)

柴田清継

王治本 明治三十九年 北海道における詩作と交流

— 小樽・札幌・室蘭・函館 (第四回・完) —

柴田清継

(六) 札幌 その他

これまでに挙げたもの以外に、札幌での王治本と現地文人との交流の跡を示す作品は、十一月二十九日から十二月六日にかけての『北海』にあと十数篇掲載されており、それらの作品をこの(六)で取り上げたい。その大半は間もなく札幌を去る王の留別と現地文人の送別の作であるが、それらとはまた別の作品をまず見ておこう。

それは『北海』十二月五日の文苑掲載の、王治本の「蝦字詩三首」(北海道に関係の深い「蝦夷」にちなんで「蝦」の字を韻字とした作品)で、三首それぞれ「札幌游中」「贈理堂」「自慨」との副題が付けられている。識語に「読湘香吟稿有豊韻蝦字詩戲歩三首博榮 彰園老人王治本初稟」「湘香の吟稿を読むに蝦字を豊韻する詩有り。戯れに歩すること三首。(下略)」とあるが、湘香の原作は見いだせていない。

蝦字詩三首¹ 王彰園

札幌游中

男事桑麻女織紗 男は桑麻を事とし 女は紗を織る
十年教養又何加 十年の教養 又何をか加えん
北来平野皆環海 北のかた平野に來れば 皆海環る

東去高臺有燦霞 東のかた高臺に去けば 燦霞 有り
喜得三山堪涉覽 喜得^{さいわ}に三山は 涉覽するに堪えたり
奚須四籟動吁嗟 奚ぞ須いん 四籟 動もすれば吁嗟するを
煥然大啓文明象 煥然として大いに啓く 文明の象
革尽夷風旧日蝦 革め尽くす 夷風 旧日の蝦

贈理堂

娑娑松影撲窓紗 娑娑たる松影 窓紗を撲つ
詩興還憑酒力加 詩興 還お酒力に憑りて加わる
鑪内香茶煎白露 鑪内の香茶は白露を煎じ
壺中仙葉鍊丹霞 壺中の仙葉は丹霞を鍊る
解臚理腦無疑慮 臚を解き腦を理めて 疑慮 無く
着手回春在咄嗟 回春に着手すれば 咄嗟に在り
偶爾間從郊外歩 偶爾^{たまたま} 間に郊外を歩めば
豊川渚上學撈蝦 豊川渚上 撈蝦を学ぶ

自慨

昏花老眼罩紅紗 昏花(霞む)せる老眼 紅紗に罩われ

両鬢年来白更加 両鬢 年来 白 更に加わる

萬里游踪忘歲月 萬里の游踪に歲月を忘る

半生痼疾是煙霞 半生の痼疾は是れ煙霞

琴尊入座誰無句 琴尊 座に入らば 誰か 句 無からん

風雨懷人我有嗟 風雨に人を懷い 我 嗟く有り

閑閑西陽供笑語 閑に西陽を閲みて 笑語に供す

痴郎偏愛帶鬚蝦 痴郎(馬鹿な私)は偏に愛す 鬚を帶ぶる蝦

第一首第二句は『左伝』哀公元年に見える言葉―「十年教訓」(十年、民を教えざとす)を用い、第一句と合わせて、道民が心を一にして勵んできた北海道開拓の跡を振り返った表現だと思われる。第四句の後には「扶桑之東玄海上有集真島島上有臺曰燦霞」との自注がある。これは、唐の蘇鶚の『杜陽雜編』巻下に見える「大中年間(八四七―八六〇)、日本国の王子が来朝し、(我が国の東三萬里に集真島という島があり、その島には凝霞台がある)」と言った」という故事と似ており、作者はこれを典故として使おうとしながら、細部を誤ったものと察せられる。第五句の「三山」は、『史記』封禪書の記載に淵源する渤海中の三神山のことで、その後の伝説の転変拡大により日本(列島全体)を指すのに用いられるようになった言葉である。第六句は『詩経』秦風「權輿」の後半―「於我乎、每食四簋、今也每食不飽。于嗟乎：」を典故として用い、句全体としては、毎食腹いっぱい食べられることを強調した表現となっている。

第二首の第五句は、人の頭蓋骨を切開して脳を治療した前漢初期の医者、淳于意のこと(『抱朴子』至理)を踏まえている。

これと同題の小川黙淵の作品三首が翌六日の『北海』文苑に載つ

ており、その韻字も王の作品と全部一致するにもかかわらず、第一首に「次理堂詞宗韻」との副題が添えられているのが、奇異の感を抱かせる。ただ、第一首の識語に「丙午中秋理堂詞宗大会同人於其第得月□。張觀月燕然是夜無月」云々(丙午中秋理堂詞宗 大いに同人を其の第得月□に会し、觀月燕を張る。然れども是の夜は月無し。)とあることから推察すれば、中秋の日(陽曆十月十二日)の理堂宅での集まりで理堂がまず湘香の蝦字詩に次韻する詩を詠み、これに黙淵が次韻したため、そのような表現になったのだらうと思われる。なお、この中秋の時点では王はまだ来幌していなかったが、黙淵は後日また疊韻して三首一セットの作品に仕立てたのである。その疊韻の第一首が、識語に「天長節後一日理堂詞宗招清国儒士王漆園開詩筵予亦陪焉」(天長節後一日理堂詞宗 清国儒士王漆園を招き、詩筵を開く。予も亦陪す。)とある通り、天長節の翌日(十一月四日)の理堂宅での王治本招待の詩筵における作品だった。それは次のようなものである。

蝦字詩三首(其二) 小川黙淵

晚來風雪撲臆紗	晚來 風雪 臆紗を撲つ
須是鑪頭默炭加	須く是れ鑪頭に 默炭 加うべし
鏡下伝箋開白戰	鏡下 箋を伝えて 白戰を開き
壁間貼画漲紅霞	壁間 画を貼りて 紅霞 漲る
連宵醉興多豪健	連宵の酔興 豪健 多く
滿座墨痕堪羨嗟	滿座の墨痕 羨嗟するに堪えたり
痛飲淋漓澆磊碗	痛飲 淋漓 磊碗を澆ぎ
高歌乘興舞撈蝦	高歌し 興に乗じて 撈蝦を舞わん

「黙炭」は「黙炭」（広く炭または炭火のこと）の誤りと思われる。末句の「撈蝦」は、黙淵の郷里出雲のドジョウ掬いならぬ、エビ掬いということになる。

次に、王治本の留別と現地文人の送別の作、計十数篇を見ていきたいが、そのうちの一篇を除き、詠作の日にちが不明で、詠作の順序も定かではない。はつきりしているのは王治本が札幌を去る十一月十六日より前に詠まれたということだけである。彼がこの日に札幌を離れたということは、この日のうちに室蘭に着いた彼が理堂に送った書信の日付から知られるのであるが、このことについてはまた後で言及することにする。

とりあえず最も掲載日の早い、十一月二十九日掲載の湘香の作から取り上げることしよう。

送食硯齋王先生 新居 湘香

乗舟食硯学坡仙 桴に乗り 硯を食らいて 坡仙〔蘇東坡のこと〕に学ぶ

遊遍扶桑三十年 扶桑に遊遍ふこと 三十年

筆落鐘王皆鳳翥 筆 落つれば 鐘王〔書家の鍾繇と王羲之か〕皆 鳳のごと 翥り

詩成鮑謝尽珠聯 詩 成れば 鮑謝⁴ 尽く珠 聯なる

行雲流水元無意 行雲流水 元 無意

楓葉蘆花別有天 楓葉蘆花 別に天 有り

翰墨場中忘老至 翰墨場中 老いの至らんことを忘る

貽謀未必買良田 貽謀〔子孫に対する父祖の教え〕 未だ必ずしも良田を買わず

到处優游詩酒仙 到处 優游す 詩酒の仙

蓬萊島裏可延年 蓬萊島裏 年を延ばす可し

搜腸自愧無佳句 腸を搜して 自ら愧す 佳句 無きを

又手尤驚有好聯 手を又むや 尤も驚く 好聯 有るに

淡雪初冰落木節 淡雪 初氷 落木の節

残香賸馥寒花天 残香 賸馥 寒花の天

簪纓抛去揮椽筆 簪纓 抛ち去りて 椽筆を揮う

須識秋成在硯田 須く識るべし 秋成〔秋の実り〕は硯田に在るを

この作品を王治本は次のように評している。

二首、咳唾成珠玉、揮灑落烟雲、造句措辭、悉皆成為妙諦。

非老手不辨。前首佳句、實獲我心、後首結句、悉是実況。敬

服々々。客日再当答和。（二首は、咳唾 珠玉と成り、揮灑して

烟雲に落ち、造句措辭、悉皆妙諦と成なる。老手に非ずんば辨せず。

前首の佳句は、実に我が心を獲、後首の結句は、悉く是れ実況なり。

敬服々々。客日再び当に答和すべし。〕

この評語の末尾には「丙午秋九 王治本拜読」と記されている。この年の陰曆九月は、陽曆では十一月五日までとなる。王が厳密な日付意識のもとに記したとすれば、詠作の日にちを絞れることになるが、いかなるものか。

次は十一月三十日掲載の王治本の「留別」である。

留別⁶

彫園 王治本

相逢多勝友 相逢えば 勝友〔非常に優れた友〕 多く

詩酒迭開筵 詩酒 迭わるがわる筵を開く

海国留佳話 海国 佳話を留め

天涯縮夙縁 天涯 夙縁を縮ぶ

衰年偏畏冷 衰年 偏に冷きを畏れ

久客欲思旋 久客〔久しく旅にある人〕 旋らんことを思わんと欲す

臨別情難遣 別れに臨んで 情 遣り難く

孤燈亦自憐 孤燈も亦 自ら憐む

半月羈踪住

半月 羈踪 住まり

生涯託硯田

生涯 硯田に託す

人皆憐過客

人皆 過客を憐めども

我漫学游僊

我は 漫か游僊に学ぶ

地擅魚塩富

地は魚塩の富を擅にし

天開雲月妍

天は雲月の妍しきを開く

携将琴劍去

琴劍を携えて去り

一棹到長川

一棹 長川に到らん

この作品は、上掲の湘香の作品と同韻であるが、それが偶然なのか、それとも何らかの関連性があるのか、その点は不明である。

この作品に対しては次韻の作が三篇掲載されている。掲載順に見ていくことにしよう。まずは十二月一日掲載の陳樹棠の作である。

第二首のみ挙げることにする。

送王先生

吟秋 陳樹棠

相逢俄作別 相逢うや 俄に別れを作す

苦口說帰田 口を苦くして 田に帰れと説く

卅載風塵客 卅載 風塵の客

半生詩酒仙 半生 詩酒の仙

寒蟾千里朗 寒蟾 千里 朗らかに

白雲一天妍 白雲 一天 妍し

遊歴吾儕事 遊歴は吾が儕の事

悠然歎逝川 悠然として逝川〔過ぎ行く時間〕を歎く

次韻の二つ目は十二月二日掲載の理堂の作である。

次王漆園留別韻送其婦二首⁷ (C)

一自遊蹤駐 一たび遊蹤 駐まりしより

動來翰墨筵 動もすれば来る 翰墨の筵

同文催会合 同文 会合を催し

異境証因縁 異境 因縁を証す

未及舒懷坐 未だ懷いを舒べて坐するに及ばざるに

已聞回踵旋 已に聞く 踵を回らして旋ると

謝君刪我句 謝す 君 我が句を刪り

転看点頤憐 転じて看て 頤を点じて憐しむを⁸

楽矣哉夫子 楽しきかな 夫子

終生寄硯田 終生 硯田に寄る

筆鋒追逸少 筆鋒は逸少〔王羲之のこと〕を追ひ

詩格逼坡僊 詩格は坡僊に逼る

別日風光慘 別るる日 風光 慘たり

逢時月色妍 逢いし時 月色 妍しかりき

加餐不多語 加餐せよ 多くは語らじ

初雪満山川 初雪 山川に満つ

次韻の三つ目は十二月三日掲載の湘香の作二首である。第一首だけ挙げることにする。

頼祭魚書屋送王漆園先生次其留別韻 湘香 新敦

肴核多珍味 肴核 珍味 多し

幾回陪几筵 幾回か几筵に陪する

詩雖無進境 詩は進境 無しと雖も

酒得結良縁 酒は良縁を結ぶを得たり

雲水思悠遠 雲水 悠遠を思い

兎鳥歎軫旋 兎鳥〔時間の比喩〕 軫旋〔束の間〕を歎く

醉毫存故態 醉毫〔醉後に作った詩や絵〕も 故態〔平素の様子〕存す

蛇蚓有誰憐 蛇蚓〔拙い字の比喩〕 誰の憐むか 有らん

この湘香の作の題により、以上四篇が理堂の頼祭魚書屋の席上で日と同じくして詠まれたものであることが想像される。前の(五)で取り上げた「頼祭魚書屋雅集」における唱酬の一コマだった可能性もあるが、裏付けになるものはない。

再び掲載の順に沿うことにすると、次は十二月二日の王治本の作

である。

理堂招飲賦贈主人併似湘香詞伯 王漆園(A)

承君情款曲 君が情の款曲なるを承け

欲去復停留 去らんと欲して 復た停留す

霽雪寒猶積 雪 霽るるも 寒くして猶お積もり

残雲湿不流 雲 残し 湿りて流れず

一尊添醉興 一尊 酔興 添わり

三疊発清謳 三疊 清謳 発す

省識孤鴻意 省識せよ 孤鴻の意

脚蘆過野洲 蘆を脚んで野洲を過ぐるを

詩句の後に「樵谷画史□我画蘆雁図」との自注がある。判読したい字はあるが、樵谷画史が私のために「蘆雁図」を描いてくれたという意味に違いあるまい。

これに次韻したものが二篇あり、一つはこれのすぐ後に載る理堂の作である。

次漆園所贈韻却寄 関場 理堂¹⁰ (B)

悵然何忍別 悵然たり 何ぞ別るるに忍びん

執袖勸淹留 袖を執りて 淹留せんことを勧む

頼喜琴尊滴 頼いに喜ぶ 琴尊 満つるを

休嘆歲月流 嘆く休かれ 歲月 流るるを

客心存筆墨 客心 筆墨に存し

情緒発歌謳 情緒 歌謳に発す

雪霽推窓戸 雪 霽れて 窓戸を推せば
雁過蘆荻洲 雁は過ぐ 蘆荻洲

もう一つは十二月三日掲載の湘香の作である。

席上次韻 湘香 新敦

輞川雖忽去 輞川〔王維のこと〕は忽ち去ると雖も

妙墨百千留 妙墨 百千 留む

逸氣瞻山峙 逸氣 山の峙つを瞻

清音聽水流 清音 水の流るるを聴く

生涯甘淡泊 生涯 淡泊に甘んずるも

風物入歌謳 風物 歌謳に入る

却想京華夢 却つて京華の夢を想わんも

応回氷雪州 応に氷雪州に回るべし

墨陣忘榮辱 墨陣 榮辱を忘れ

仙蹤任去留 仙蹤 去留に任す

菊枝如我瘦 菊枝は我の如く瘦せたり

蠟淚為誰流 蠟淚は誰が為にか流れん

共執紅螺飲 共に紅螺〔あかにして作った杯〕を執りて飲み

快吟白雪謳 快く白雪を吟きて謳う

相逢忽相送 相逢うや 忽ち相送る

匹馬向蘭州 匹馬 蘭州に向かう

王治本のこの後の行程を勘案して解釈すれば、第二首末句の「蘭

州」は室蘭を指していることになる。以上の湘香の作に対し、王治本の「雅韻悠揚、深情貫注。語無泛設、筆有餘妍。洵是斲輪妙手弟王治本拜読〔雅韻 悠揚として、深情 貫注す。語に泛設無く、筆に餘妍有り。洵に是れ斲輪の妙手なり。〕との評がある。

以上三篇も、前の四篇と詠作の時と所が同じか否かは不明ながら、同じく理堂招飲の席上の一連の作と見ていいだろう。ところで、十二月二日の『北海』文苑にはA〜Cの記号を付けた三篇と、その後、理堂の「十一月十五日夜王漆園來過酒間画石樵谷補竹余即題詩一篇〔十一月十五日夜王漆園來過し、酒間 石を画き、樵谷 竹を補う。余即ち詩一篇を題す。〕(D)」と題する一篇とが掲載されているのだが、この配列の仕方はA〜Cの三篇は十一月十五日とはまた別の日の作品であることを暗示しているように思われる。そして、十一月十五日が王治本の札幌宿泊の最終日だったことを加味して考えてみると、この三篇は十一月十五日より前の日の作品だったことになる。次にDの作を取り上げるが、旅立ちの前夜までこの老詩人は詩酒の宴を楽しんでいたわけである。

十一月十五日夜王漆園來過酒間画石樵谷補竹余即題詩一篇¹¹ 関場理堂

一夜微雪打書窓 一夜 微雪 書窓を打つ

忽開離筵剔銀釘 忽ち離筵を開き 銀釘〔銀白色の燭台〕を剔る

興酣侍童磨墨進 興 酣にして 侍童 墨を磨りて進む

不恨我無筆如杠 恨まじ 我 筆の杠の如き無きを

漆園擲管画巨石 漆園 管を擲りて 巨石を画く

太湖一片色深碧 太湖（太湖石のこと） 一片 色 深碧たり

華亭双鶴去何辺 華亭の双鶴 何れの辺にか去る

丹成于今留鹿迹 丹 今に成り 鹿迹に留まる

樵谷補之竹数竿 樵谷 之に補う 竹 数竿

煙梢碧幹傲歲寒 煙梢 碧幹 歳寒に傲る

嫩葉帶露影參差 嫩葉 露を帯び 影 參差

頑石呼雲怒猊蟠 頑石 雲を呼び 怒猊 蟠る

諸君才華真矯縱 諸君の才華 真に矯縱なり

吾亦淋漓對春甕 吾も亦 淋漓として 春甕（酒がめ）に對す

題句欲寄長相思 句を題し 長相思を寄せんと欲すれば

有此竹石入幽夢 此の竹石の幽夢に入る有り

次に十二月三日掲載の、北辰病院スタッフに対する王治本の贈詩を挙げよう。

丙午秋九遊次幌城賦贈北辰病院諸員

贈大久保脩一先生 王彰園

出蛇走癩妙通神 蛇を出だし 癩を走らせて 妙 神に通じ

療却人間百病身 療却す 人間 百病身

携得青囊來海上 青囊（医者が医書を入れておく布袋）を携えて 海上に來らば

滿園紅杏有恒春 滿園の紅杏 恒春 有らん

贈杉山君

脈経三折号良医 脈 三折を経て 良医と号す

方学千金自出奇 方まがく千金（千金方）を学びて 自ら奇を出

だす

能察陰陽調六脈 能く陰陽を察て六脈を調う

应知郭玉是君師 应に知るべし 郭玉（後漢の医者） 是れ君

が師なるを

贈妙子女史

織織妙手善回春 織織たる妙手 善く回春せしめ

鍊就金丹能活人 金丹を鍊り就して 能く人を活かす

料識生來非俗骨 料識す 生來 俗骨に非ず

蟾宮窃藥是前身 蟾宮に藥を窃みたる 是れ前身ならんを

第一首の贈詩の相手—大久保脩一は、『自大正七年至大正八年 東北帝国大学理科大学医科大学一覽』に明治三十五年の第二高等学校医学部卒業生としてその名が見える、新潟出身の大久保脩一¹³である可能性がある。だとすれば、医学部卒業後間もない若手の医者だったことになる。起句の「出蛇」は、河内太守劉勲の娘の左膝の出来物の治療のため呼ばれた華佗が、縄で犬に馬をつないで引つ張らせ、犬が疲れて動けなくなつた後、犬のちぎれた腸を取り出して、娘の患部に塗つたところ、三尺の長さの蛇のような物が出てきたという、『三国志』方技伝の裴松之注に引く『華佗別伝』に見える話に基づく。「走癩」は、宋の元嘉年間、広陵廟の門下に宿つた夜、婿に化けて現れた何物かに魅惑されて病んだ張方の娘に、鍼石

に練達した王纂が一鍼を下したところ、娘の布団から一匹の鰯が出てきたという、『初学記』巻二十に引く『異苑』に見える話に基づく。転句の「海上」は上海を指す可能性もある。もしそうなら、王治本が帰省の際、連れて帰りたいと思うほど、大久保の医療技術にほれ込んだということになるだろう。ちなみに、王治本の十一月十九日付の室蘭からの理堂宛ての書信（関場理堂資料書信19）、及び同月三十日の函館からの理堂宛ての書信（同25）に記すところによれば、彼はその頃「尻上之恙」（臀部の出来物か）を患っており、北辰病院で治療を受けていたようである。

第二首の起句には「左伝」定公十三年に見える言葉——「三折肱知為良医」（自分の肱を三度折ってみなければ良医になれない）が典故として使われている。

第三首結句に言う「月の宮殿で薬を盗んだ者」とは、嫦娥だろう。夫の後羿が西王母からもらった不死の薬を盗んで飲み、月に逃げて蟾蜍になった故事（『淮南子』覽冥訓）に基づくこと、言うまでもない。以上三首の次に「贈留子女史」と題する作があり、これも一連の作の一つに違いないが、省略する。

王の札幌滞在中の作品としては、また、関場理堂資料8に「旅廳即事」と題する作品もあるが、これも省略したい。

室蘭

王治本の室蘭行きは、当初十一月十二日ごろが予定されていたようだが、実際には十六日まで延びた。ここで、室蘭に着いた彼が理堂に送った書信（関場理堂資料書信3）を紹介しておこう。

今晨辱承駕送、感謝之至。弟於午後三時已抵室蘭、当即持函往訪。介書諸友、多係他出、不晤。病院長明晨当再往訪也。（中略）樵谷翁、湘香翁、黙淵兄乞代伝言道謝。十一月十六日午後五時（今朝はわざわざお見送りいただき、感謝に堪えません。私は午後三時に室蘭に到着し、直ちに紹介状を持ってご紹介くださったご友人の方々を訪ねましたが、ほとんどの方がご不在で、会えませんでした。病院長先生は明朝また訪ねようと思います。（中略）樵谷翁、湘香翁、黙淵兄にもよろしくお伝えください。十一月十六日午後五時）

関場理堂資料書信1（関場理堂資料書信3の手紙が入っていた封筒の表と裏の写し）によれば、「室蘭創成旅館¹⁵」から書き送っている。次に、三日後の十九日付の王の理堂宛ての書簡（関場理堂資料書信19）も見てみることにしよう。

理堂詞兄大人閣下（中略）蘭地諸友、多有他出、幸蘭崖国手、極承愛好、諸多周旋、兩三日來、已得三十金。（中略）蘭港新聞、人物既少、古蹟亦無。欲擬賦詠、無可着想、僅得八首而已。錄請裁政、并希加評。付交大川黙淵兄、附刊新聞為託。（中略）弟王治本頓首 十一月十九日（後略）

〔理堂詞兄大人閣下（中略）室蘭のご友人の方々は、大抵お留守だったのですが、幸い蘭崖先生（医師）には大変よくしていただき、あちこち周旋していただいたおかげで、この二、三日で三十円の実入りがありました。（中略）室蘭は新開地で、取り上げるべき人物は少ないうえに、古蹟もなく、詩を詠もうとしても着想の拠り所がないため、僅か八首しかできておりません。それを書き写しますので、ご斧正、並びにご批評を

お願いいたします。また、新聞に掲載していただきたく、小川黙淵兄へのお渡しもお願いいたします。(中略) 弟王治本頓首 十一月十九日(後略)

以上の文章の後に、「室蘭襍詠八首」と題する作品がしたためられている。その作品を紹介する前に、二三のコメントをしておきたい。十六日の書信で「明朝訪ねることにしたい」とされた病院長とは、この書信中の「蘭崖国手」であろうが、残念ながら、この人物については情報が得られない。また、王がこの数日で稼いだ(もちろん詩・書・画等の揮毫で)「三十金」(三十円)が当時の程度価値だったかについて、参考として、明治三十九年に銀行の初任給が三十五円で、同四十年に公務員のそれが五十円だった¹⁶ということを挙げておこう。

さて、王が理堂に「裁政」「加評」と北海タイムス社の小川黙淵への渡しを頼んだ作品(『北海』文苑には十一月二十九日に掲載される)は次のようなものだった。

室蘭襍詠八首

鳳巢山下港門開 鳳巢山下 港門 開け
絡繹¹⁷村居傍海隈 絡繹たる村居 海隈に傍う
函¹⁸島青洲通一水 函島(函館) 青洲(青森) 通じて一水
漁船商船去還来 漁船 商船 去り還た来る
両岬崔嵬左右環 両岬 崔嵬として 左右に環り
層々門戸鎖重関 層々の門戸 重関を鎖す

幾疑隔絶無来路 幾ど 隔絶して 来路 無からんかと疑えるとき

潮送行舟入海湾 潮 行舟を送りて 海湾に入らしむ

港経新築水雲寛 港は新築を経て 水雲(水と雲が接する景色) 寛く

人喜番居楽土安 人 喜んで番居し 楽土 安し
為羨此中多善士 為に羨む 此の中 善士 多く
儼如入室有芝蘭 儼かも室に入るに 芝蘭 有るが如きを

追溯荒凉卅載前 荒凉たる卅載前に追溯すれば

漁家三五棧橋辺 漁家 三五 棧橋の辺り
自從置使頻開拓 使(開拓使)を置き 頻りに開拓せしより
新旧名称亦変遷 新旧の名称も 亦 変遷す

大黒岩辺夜色昏 大黒岩辺 夜色 昏く
風狂浪急勢如奔 風 狂おしく 浪 急に 勢い 奔るが如し

燈臺好有明燈在 燈臺 好(さいわ)いに明燈在り
照徹崖前過客輪 崖前 客輪 過ぐるを照徹する有り

高山頂上八幡祠 高山頂上 八幡祠
憑仗威靈鎮海陲 威靈に憑仗して 海陲を鎮む

策杖登臨遙一矚 杖を策(つ)きて登臨し 遙かに一矚すれば
煙波東去渺無涯 煙波 東去 渺として 涯 無し

穹碑如劍矗雲霄 穹碑 劍の如く 雲霄に矗高く聳え立つ様に

歌頌使君公益饒

歌頌す 使君 公益 饒かなるを

相与幌城銅像碣

幌城の銅像碣と相与に

並教千載姓名標

並びに千載に姓名を標あはさしむ

慨昔人稀物力單

慨く 昔は 人 稀に 物力 單うく

著名製産僅雲丹

著名なる製産は僅かに雲丹のみ

而今水陸通輸出

而今は 水陸 通じて輸出し

海錯山珍百貨繁

海錯〔海産物〕 山珍 百貨 繁し

第三首の後半は「孔子家語」六本の「与善人居、如入芝蘭之室」云々に基づく表現。第六首結句の表現は柳永の詞「洞仙歌」(仙呂調)前

闕第三句の「渺渺煙波東去」が下敷きになっているように思われる。

第七句は「三十四年七月北海道炭礦鉄道会社が」、二十一年から第

二代北海道庁長官を務めるなど、長年にわたり北海道の開拓に力を

尽くした永山武四郎(一八三七―一九〇四)の「徳を頌し、室蘭停車場

前の広場に建設」した「頌徳劍状碑」のことである¹⁹⁾。

王治本は翌二十日にも、次のような手紙(関場理堂資料書信22)を

理堂に書き送っている。割注の部分はへ)に入れて示すことにする。

理堂詞兄大人閣下(中略)今晨接展手教又替証毫紙。計金七円

五十銭、係新井氏分照収。謝々。百道翁分五円、附奉手書一紙。

在百道翁額潤毫円半、準作奉贈、其餘周旋一枚(一直半切毫円半、

一画石式円)、両共参円半、乞代持此手書向取、使不致閣下為

難也、拜禱、拜禱。(中略)昨夕拙吟第一首有重字。一带二字改

作絡繹。黙淵兄処亦望転致為荷。(中略)弟王治本頓首 十一月二十日

(理堂詞兄大人閣下(中略)今朝貴簡及び為替証書を確かに拝受いたしました。計七円五十銭、新居氏の分、過不足なく領収いたしました。ありがとうございました。百道翁の分五円につきましては、手書一枚を同封いたします。百道翁の額潤毫円半は、私からの贈与とさせていただきますが、その他の周旋一枚(直半切 一点 毫円半、画石 一点 式円)、計参円半につきましては、私の代わりにこの手書を持って請求に行ってくださいるようお願いいたします。閣下ご自身にはつくらく感じにならないで済むようにいたしましたので、伏してよろしくお願いいたします。

(中略)昨夕の拙吟の第一首に重字がありました。「一带」の二字は「絡繹」に改めます。黙淵兄の方へもお回しくださいれば幸いです。(中略)弟王治本頓首 十一月二十日)

潤筆料支払いに関することが主な要件となっている。すなわち、

湘香の分の為替証書は、この書信に同封して送られてきた。百道の未払い分について、王は「額潤」(扁額等の代金ということか)の一元半は贈与という扱いに変更して譲歩したものの、残りの三円半については、理堂に請求に行くことを頼んでいる(よく理解できぬまま暫定的な訳語を充てた個所に傍線を付けた。理堂にはつくらく感じないで済むようにしたと言っているのは、あなたは手書を持参するだけでよく、直接百道に請求しなくてもよいということだろう。

十一月二十日の書信にある通り、王治本は二十二日か二十三日に

函館

函館

室蘭を離れたと見ていいだろうが、函館に着いた後の彼の理堂宛ての書簡で、現在見られる最も早いものは、次に挙げる十一月三十日付けのもの（関場理堂資料書信25）である。

理堂仁兄医伯先生閣下（中略）百道翁潤欸、如未遞来区々之数、亦無勞催囑矣。寓函六日、筆況未佳、看明後土日曜生色如何、再定行止。附録函海襍詠、聊博一粲。如有近作希為見示為荷。（中略）弟王治本頓首 十一月卅日（後略）

〔理堂仁兄医伯先生閣下（中略）百道翁の潤筆料、もしまだ送られてきていないようでしたら、僅かな額ですが、もう催促していただくには及びません。函館滞在六日になりますが、潤筆の業、未だはかばかしくありません。明日土曜、明後日日曜に好転の気配があるか否かを見たいので、今後のことを決めたいと思います。「函海襍詠」を付け足しとして書き写しておきます。ご笑覧ください。近作があまりでしたら、拝読いたしたく存じます。（中略）弟王治本頓首 十一月三十日（後略）〕

以上の書信の中で王治本は一言も触れていないが、書簡に同封された紙には、右半分に「雄島雜詠十首」がしたためられていて、こちらの方がメインであった。「函海襍詠」は、その同封紙には「附録癸未前游函海八景詩八首距今已二十四年矣」と題してしたためられており、細かい字句の異同はあるものの、十六年の函館訪問時の「函館八景」詩（『函館新聞』十六年七月二十五日所載）と基本的に同じである。この作品はさらに、三十九年十二月十八日の『北海』文苑にも「函海八景 五絶八首」と題して掲載されており、これまた若干の字句の異同があるが、ここでこの作品にこれ以上言及すること

はしない。当時の函館における王治本の詩文交流について述べた拙稿²⁰をご参照いただければ幸いである。

「雄島雜詠十首」は十二月九日の『北海』文苑にも掲載されているが、ここでは関場理堂資料書信25のものを挙げることにしよう。異同については注記することにする。この作品は、各首、小題が付されているが、それ（を）の中に入れて示すことにする。第一首「巴港」と第六首「千代岱」は省き、その他の八首を掲げよう。末尾に筆者が付した①②等の番号は、何首目を示すものである。

渡島雜詠 十首

峻嶒百丈勢冲天	峻嶒として 百丈 勢い天を突き
相对駒峯隔海眠	駒峯（駒ヶ岳）と相對し 海を隔てて眠る
豈是金牛開蜀道	豈に是れ金牛 蜀道を開き
五丁鑿破白雲巖	五丁 白雲巖を鑿ち破るならんや（臥牛山）②
北海芙蓉駒嶽高	北海の芙蓉 駒嶽 高く
奇峯如戟亦如刀	奇峯 戟の如く 亦 刀の如し
我今欲向山靈問	我 今 山靈に向かいて問わんと欲す
底事煙噴復怒号	底事 ^{なごころ} ぞ煙 噴き 復た怒号するかと（駒岳）③
一碧相連大小湖	一碧 相連なる 大小の湖（天沼と小沼）
水天空濶似蓬壺	水天 空濶にして 蓬壺に似たり
磨銅擬鑄凌烟像	銅を磨いて 鑄んと擬す 凌烟の像
襄鄂將軍七尺軀	襄鄂將軍 七尺の軀（大沼）④

福山山麓旧時城

福山山麓 旧時の城

白雉巍巍氣象宏

白雉〔白い城壁〕 巍巍として 氣象 宏し

今日槽門留一角

今日 槽門 一角を留む

高墉荒落築新甍

高墉 荒落して 新甍を築く〔福山城〕⑤

誇説勝区谷地頭

誇つて説く 勝区 谷地頭

公園風景四時幽

公園の風景 四時 幽なり

更兼陳列多珍品

更に兼ねて陳列す 多くの珍品

任尔縦観一块²¹遊

尔 縦観し 一たび块遊するに任さん
〔谷地頭〕⑦

五廓宏開角有稜

五廓 宏く開き 角に稜有り

当年形勢亦堪憑

当年の形勢 亦 憑るに堪えたり

劇憐今日成荒塁

劇だ憐む 今日 荒塁と成り

製壳争伝六月水

製壳 争つて六月の水と伝うるを〔五稜郭〕⑧

館城地傍館川東

館城 地は傍う 館川の東

一敗帰来百堞空

一敗 帰り来れば 百堞 空し

回首星霜三十載

首を回らせば 星霜 三十載

只餘牧笛弄西風

只だ餘す 牧笛 西風を弄するを〔館城址〕⑨

褒卹貞魂百尺碑

貞魂を褒卹する 百尺〔約六巴〕の碑

縦然抗命亦堪悲

縦然命に抗えるならんとも 亦 悲しむに
堪えたり

一腔碧血終成恨

一腔の碧血 終に恨みと成る

説与臥牛未²² 必知 臥牛に説与せんも未だ必ずしも知らじ

〔碧血碑〕⑩

②の転句は、李白の「上皇西巡南京歌」其八に「秦 蜀道を開き 金牛を置く」とあるのなどに関連させて、このように言ったのだろう。結句の「五丁」は揚雄の「蜀王本紀」〔藝文類聚〕卷七所引)で

天が蜀王のために生まれさせたという五人の力士のこと。

④の結句の「褒鄂將軍」は、唐の開国の名将―褒国公段志玄と鄂国公尉遲敬徳の併称。一首はこれらを日露戦争で功績のあった大山巖元帥と東郷平八郎大将の比喩として使い、三メートルもの高さの彼らの銅像が建設中であることを結句で表現している。

⑤で詠まれているのは福山城の本丸表御殿玄関。本丸御門、天守とともに残存していた旧表御殿は、明治八年開校の松城小学校校舎として利用されたが、三十三年の新校舎建設に伴い取り壊された。しかし、玄関だけは新校舎に取り付けられ、引き続き利用されることになった。

⑧の結句は、天然水の製造・採取と販売を手掛けていた中川嘉兵衛が明治二年に渡道、五稜郭の堀にできる水に着目し、翌年には製水場を設けて生産・販売をした、いわゆる「函館水」²³のことを詠み込んでいる。

⑨で詠まれている「館城」とは、明治元年、箱館戦争の直前に松前藩により渡島国檜山郡の館(現厚沢部町)に建造された城。完成直後に、旧幕府軍の攻撃を受け、落城した。

⑩で詠まれている「碧血碑」は八年に函館山(臥牛山)に建立された戊辰戦争、特に箱館戦争における旧幕府軍の戦死者を記念する

慰霊碑のこと。

二日後の十二月二日にも王治本は理堂宛てに葉書（関場理堂資料書信4²⁴）を書き送っている。その葉書の文面を見てみることにしよう。

（前略）今晨接到善教并附替証金五円収領。諸勞清神、不勝銘佩。晤百道翁、希為致謝。乃荷寓函六七日、所得僅一月之數、擬一二日後即出發由青森返橫矣。（後略）

〔（前略）今朝貴簡、並びに為替証書五円分を領取いたしました。いろいろとお心遣いをいただき、このご恩は忘れません。百道翁にお会いになつた折は、よろしくお伝えください。函館滞在六、七日になりますが、入りは僅かに（普段の）一日分程度です。一兩日の後には出發し、青森を経て横浜に帰ることにしました。（後略）〕

百道翁、いったん免除してもらった分も含め、潤筆料の全額を支払ったことが分かる。「一月」の「月」は「日」の誤りだろう。

おわりに

十二月六日に横浜に帰着した王治本は、次のような手紙（関場理堂資料書信16）を理堂に書き送った。

理堂仁兄医伯大人閣下（中略）四夕発函渡森、翌早登車、六日午前返横。（中略）迹日探訪東友、稍作勾留、擬二十左右、起程回国、俟明春三、四月再作東行。弟係久慣遠遊、不甘家食、浮家泛舟、願与鷗鷺為盟、不知老之将至云尔。（中略）弟王治本

十二月十一日

〔理堂仁兄医伯大人閣下（中略）四日の夕刻、函館を發つて青森に渡り、翌朝汽車に乗って、六日の午前中に横浜に帰着しました。（中略）近日中に東京の友人たちを訪ね、しばらくこちらに逗留したうえで、二十日ごろ帰国の途に就き、明春三月か四月にまた日本に戻つてようと思つています。私は長らく旅を習いとし、家にじつとしていられない質で、浮舟のような暮らしをしつつ、世俗を離れた文雅な交わりを続けたいと願ひ、老いがだんだんと迫つて来ているのも忘れていきます。（中略）弟王治本 十二月十一日〕

ここに述べられた心算より少し遅れ、翌四十年の六月に王治本は古里浙江省慈溪の友人、阮丙炎を連れて横浜に戻つてきた。それ以後は、永井禾原（一八五二―一九一三）の周旋によつて『東京日日新聞』文苑の評者を担当しつつ、日本における最後の長期旅行となる備前から安芸にかけての漫遊を終えた後、年末に横浜に戻り、間もなくまた古里に帰つた半年後の四十一年六月（清曆では光緒三十四年五月）にその七十四年の生涯を閉じることになるのである²⁵。

注

- 1 この作品は関場理堂資料81にも見える（全首を統括する題は記されていない）。異同は次の通り。第二首の題を「贈理堂国手」に作る。第二首第六句の後に「咄嗟与叱咄同猶言呼吸之間」との識語がある。第三首第七句の末字を「話」に作る。
- 2 この一字、判読しがたいが、「楼」と推定される。
- 3 第三首も王治本に直接かわる内容ではないので、取り上げない。

- 4 「鮑」は南朝の鮑照に相違あるまい。「謝」は謝朓か謝靈雲のいずれかと
思われる。
- 5 『北海』十一月三十日「正誤」により、「音」を「意」に改めた。
- 6 『北海』十二月一日「正誤」により、「利」を「別」に改めた。また、こ
の作品は関場理堂資料81⑦にも見え、次のような異同がある。第二首第三
句の「過」を「遠」に、第四句の「遊」を「遊」に、第七句の「雲」を「雪」
に、それぞれ作る。第七句は「雪」の方が意味が通りやすい。
- 7 この作品は関場理堂資料47にも見える。
- 8 敵維の五律「詠孩子」に「嘉客会初筵、宜時魄再円。衆皆含笑戯、誰不
点頰憐。…」(『全唐詩』卷二六三)とあるのが参考になる。
- 9 本詩は関場理堂資料81にも見え、そこでは末句を「街廬過壁洲」に作る。
- 10 この作品は関場理堂資料47にも見える。
- 11 この作品は関場理堂資料47にも見える。
- 12 「怒貌」は怒った獅子で、筆勢の力強いことの形容。
- 13 東北帝国大学編『自大正七年至大正八年 東北帝国大学理科大学医科大
学一覽』三五五頁。
- 14 十一月十日の『北海』雑報に「王漆園氏出發期」と題する次のような記
事が載っている。「過般来当区山形屋に淹留して書画揮毫の需に応じつ、
ありし清国儒士漆園王治本氏は来十二日頃当地出發室蘭に赴き同地に数日
間滞在夫より函館を経て帰京せらる、由同氏の詩を善し書に工みなること
は夙に世人の嘆賞措かざる所幸ひ今回の來札を機とし希望者は氏の健筆を
依嘱するも可なるべし」。
- 15 創成旅館は創成館ともいい、室蘭市の札幌通りの要の位置にあった。室
蘭開拓使の中で最も熱心に事業や学問に当たり、また道内を代表する自由
民権運動家として名を残す本田新が経営していた旅館である。
- 16 週刊朝日編『値段史年表 明治・大正・昭和』(朝日新聞社、一九八八年
五十一、六十七頁)。
- 17 この二字はもと「二帯」に作るが、翌十一月二十日付の書簡(後掲)に
見える「昨夕拙吟第一首有重字、一帯二字改作繪繹」との記載により、改
めた。
- 18 「函」は『北海』十一月二十九日文苑では「画」に作る。
- 19 室蘭に永山の頌徳碑が建てられたわけは、北海道炭礦鉄道会社が「室蘭
鉄道延長海港修築之事」を官に請うた時、そのころは同庁長官を退任し専
ら兵務を専管していた永山の少なからざる幹旋により、官許が得られた
という点にあったようである。以上、和田綱紀『北海乃恩波』(三才閣、
三十六年)四十八、四十九頁の記載による。
- 20 拙稿「函館における王治本の詩文交流」(本誌第八十四号、二〇一八年)
三十六〜三十七頁。
- 21 「快」は『北海』十二月九日文苑に「快」に作る。「快」の方が意味が通
じやすい。
- 22 「未」は『北海』十二月九日文苑に「木」に作る。
- 23 北海道『新北海道史』卷三通説二(北海道、一九七一年)五七七頁等。
- 24 関場理堂資料書信4は葉書と見られるもので、日付が記されていないが、
別に関場理堂資料書信2として「札幌大通西四丁六番地/関場不二彦先生
/函館①旅屋/王彬園手泐/十二月二日午後/四時発」と表書きされ、「館
函/38.122/?」(横組み三段。下段は判読不能。上段の「館函」もかな
り不鮮明ではある)というスタンプの押された葉書があり、記載されてい
る状況からして、関場理堂資料書信4はこの葉書の裏面であると推定した。
- 25 王が阮を伴い横浜に戻って来たこと、及び王の逝去に関しては拙稿「矢
士氏澹園を訪れた清国文人―王治本と阮丙炎―」(『書論』第四十四号、

二〇一八年）にやや詳しく述べた。四十年の王の備前から安芸にかけての漫遊の一部についても一応拙稿「王治本の藝備訪問および地元文人との文藝交流」（本誌第七十六号、二〇一二年）に述べたが、その後、相当数の資料が得られたので、それらに基づき増訂する必要がある。

（しばた・きよつぐ 本学名誉教授）